

最寄の駅から、妻の加寿子に携帯電話で駅に着いたことを知らせるのが習慣になっていた。改札口を出ると、「徳庵駅に着いたよ」と連絡する。ただそれだけのことだが、ぼくにとつても加寿子にとつても生活のリズムになっていた。時折、加寿子が田舎の母親と電話して話していることがあるが、それがなければ加寿子の「はい、お帰りなさい」という声が返ってくる。

加寿子のその声が沈んでいた。

ぼくはだいたい決まった時間に帰宅した。定時に退社し、午後六時半には家に着く。徳庵駅から家までは徒歩で十二、三分の距離にあり、よほどのことがなければその時間にマンションのオートロックを解錠してもらった。定時に退社できない場合は、前もって加寿子に言っておいたり、急な場合は会社から連絡した。加寿子は独占欲が強いというのか、ぼくをコントロール下に置かないと気の済まないところがあった。

駅からかける電話の声で、加寿子の機嫌が分かる。「はい、お帰りなさい」と言う加寿子の声は、不機嫌と言うのではなく、弱々しかった。声に芯がなかった。結婚して三十年余、弱った声を出していても声から芯がぬけるということは滅多にない。

摂食障害で通院している娘の朱美あけみに何かあったのかと、自然と足早になる。二月の寒風吹きつける運河の石橋を渡り、その石橋からゆるやかに下る商店街を抜け、東西に走る大通りに沿って二百メートルほど行った右手にマンションがある。

冬の日暮れは早く、ぬつと大きな月が目の前の空に出ている。川面にその月明りが揺らめき、橋の欄干にユリカモメが七、八羽飛び交っていた。

「何かあったのか。……朱美に何かあったのか」

と聞いても、

「べつに、なにも」

と加寿子は言葉を濁し、やはり沈んだ表情のまま食卓につく。

「朱美に何かあったのか」

ともう一度聞いたが、加寿子はうつむいたまま、ぼくと目を合わせず食事を終え、食事の後片付けを始めた。食器を洗う加寿子の気配を背中に感じつつ、リビングルームのソファに座り、テレビをつけた。リモコンでニュース番組を選んだ。火事で死傷者が出ている様子を報じていた。

「もう、わたし、どうしていいか……」

加寿子の声がした。エプロンで手を拭きながら、こちらを向いて突っ立っていた。

「ん……」

「朱美のこと……。わたし、もう、どうしていいか分からないの。朱美、死んでしまうような気がして。今日も昼間、家で寝ていて、夕方、自分のマンションに戻って行ったんだけど、このままいったら朱美、ほんとに死ぬような気がして。わたし、どうしていいか分からないの……」

加寿子は話しているうちに涙声になった。

「朱美に何かあったのか」

「ううん、そうじゃないけど、痩せ細った朱美を見ると、死んでしまいそうな気がするの。和室の蒲団で寝かせていても、今にも息が止まるんじゃないかと心配で……。マンションに帰らないで、ここに泊まっていったらと言ったんだけど、泊まったら帰らなくなるからと言って。いくら言っても朱美、聞かないのよ。一人で帰るって言ったけど、マンションのエレベーターホールまで送っていったの」

「病院に通っているのに……。食べているって言ってるけど、ほんとにちゃんと食べているのか」

「前は一緒にお昼していたけど、お母さんに見られながら食べるの嫌だと言って、一緒に食べなくなつたから、ほんとうのところ分からないの。ちゃんと食べていたら、あんなに痩せているはずはないし……」

加寿子は抱え込んでいた胸のもやもやをぼくに打ち明け、少しは気分がらくになったようだ。

朱美は、ぼくが二十七歳の時、結婚二年目に生まれた一人娘だった。成長の早い子供のころに、綺麗な服を買ってもすぐに着られなくなるのは分かっていたが、加寿子はデパートで見栄えのする服を買ってきた。幼稚園、小学校の保護者参観には必ずといつていいほど加寿子と揃って出た。

高校は、中学校の仲良しのクラスメイトと同じ学校を受験し、合格した。クラスも一緒にになった。教科書を持ってお互いの家を行き来し、勉強もしていた。途中からもう一人加わり、昼休みには女三人で弁当やパンを食べたり話したりしていた。それが、ということがきつかけで不仲になったのか分からないが、ともかく朱美が二人から仲間外れにされた。成績が落ち、朱美は学校に行かなくなった。自分で単位制の高校を見つけてきて、そこに行きたいと言いつ出した。

ぼくは、高校に出向き、担任教諭に会って相談した。担任教諭が自宅まで来てくれ、朱美を説得してくれた。おかげでその高校を卒業できた。

大学は、朱美の希望に任せた。私立大学の法学部に入った。高校時分からアニメに興味を持ち、同人誌や個人誌を通じて作品を発表していた。コミックマーケットのイベン

トによく勇んで出かけていた。大学では漫画研究部に属し、仲の良い女友達とクラブ活動を楽しんでいた。そのころはよく食べていたし、背中から肩にかけて肉がついていた。びつしりと本を詰めたダンボール箱を抱えてイベント会場を走りまわり、友人から「重たくないの」と不思議がられるほど体力があった。

朱美がダイエットに足を踏み入れたきっかけは、インターネットのアニメ同好会のサイトで知り合ったファッションモデルの女性への憧れのようなだった。東京のビッグサイトでのイベントの折などに、ホテルで食事をしたり話し合ったりし、そのスリムな姿態に魅かれ、朱美はまず油抜きからはじめた。

最初、加寿子が朱美に「油抜きなのね」と言っていたとき、胃の調子かなにかで油こいものを控えているのだろうと思っていた。そのうちご飯の量を減らした。一年もしないうちに贅肉が落ち、ファッションモデルと遜色のない体形になった。

朱美は、よく肩が凝ると言って、加寿子にマッサージをさせていた。リビングルームのカーペットに朱美が座り、加寿子がソファアームに腰掛けて肩から背中にかけてマッサージをしていた。それでも凝りが取れない時は、ぼくが朱美の足の裏をマッサージした。カーペットにうつ伏せに寝そべらせ、足指の付け根から土踏まずを中心にマッサージした。ぼくにマッサージさせながら朱美は、

「胸の肉はすぐに落ちるけど、太股の肉はなかなか落ちない」とソファアームの加寿子に話していた。

「これぐらいにしとかないと。ダイエット食をつづけていると体力が落ちるだろ」マッサージしながら言ったが、

「栄養バランスをちゃんと考えてます」ピシヤリと朱美に言い返された。

朱美は手足が細くなり、スリムになった。身長一五五センチ、体重四三キログラムの細身の肢体であったが、小顔で顔の肉付きがよく、さほど痩せているようには見えなかった。

大学を卒業後、朱美は設計会社や小さな商社に勤めたが、結構、重い物を持って動き回っていた。昼食も同僚と一緒に食べていた。ぼくは太目の女性が好きだったので、スリムな女性は貧相に見えてならない。朱美にそのことを言ったことがあるが、歯牙にもかけぬ風だった。

朱美は二五歳までに結婚して家を出ていって言ったが、加寿子もぼくも本気にしていなかった。休日にふらりと出かけてはいたが、インターネットで知り合ったアニメサークルのオフ会だといって、帰宅後、どんな喫茶店でどんなことを語り合ったか、加寿子に楽しそうに話していた。自宅に電話がかかるとか、携帯電話で連絡を取り合っているとかといった異性の影が、朱美にはなかった。わがままというほどではないが、自

分のリズムを持っていたので異性と波長が合わないのだろう。また、波長をうまく合わせるのが煩わしいのだろうと思っていた。法学部を出ているので一般事務でも総務でもつぶしが効くはずだから、ずっと独身のままでいいのではないかと、朱美のことをそんなふうに見ていた。

「お父さん、今度の日曜日、空けておいてね。ちょっと会って欲しい人がいるの」「ん……」

「家よりも喫茶店のほうがいいでしょ。Tビルの一階の喫茶店で、十時でいいかしら」朱美は、あらかじめ加寿子に話していた。ぼくを抜きにして段取りが出来上がっていて、形式的に喫茶店で会うだけの状況は不愉快だったが、それよりも朱美が異性とそういう間柄になっていることに驚いた。なんだか狐につままれていたような気がした。

異性との付き合いについては、加寿子もほとんど聞かされていなかった。隠していると言うのではなかったろうが、朱美はこれといった素振りも見せず、インターネットのサイトで知り合った異性と交際していた。

「インターネットにあげる写真を撮って」「インターネットにあげる写真を撮って」

と言ったことがある。カメラを構えると、朱美は顎を引き、上目遣いにしんなりとした表情を作った。

「そんな妙な顔をして」

とカメラを外して笑ったが、

「オタクは皆、こうして撮るの」

朱美はもう一度その表情をし、少し斜に構えた。しんなりした表情がサマになっていた。

朱美は、交際相手にその上目遣いのしんなりした表情を向けていたのではないか。相手のなすままに身をすり寄せていく子猫のように思われているのではないか。ふと、そんな気がした。

喫茶店で朱美の交際相手と会った。鴻山貢こうやま ことみつぐと名乗った。背が高く肥っていた。細身の朱美と対照的だった。貢君は、

「結婚したいと考えています」

と殊勝な面持ちで切り出した。朱美もその気であるのが分かっていた。貢君は半年後に結婚したいと言った。

ぼくは、子供の人生に干渉したくないと考えていた。どのような相手と結婚しようが反対しないかわり、すべて自己責任でやってほしいと、朱美に早くから話していた。だから、朱美の気が済むならばと会っただけで、はなから反対も賛成もなかった。それにしても、喫茶店での安直な結婚通告に、なにかしら物足りなさを感じた。貢君の眼がな

にかの拍子に三白眼になり、ぬめりがよぎった。少しそれが気になったが、加寿子は気にしていなかった。

朱美と貢君は都市整備公団の賃貸団地を借りた。貢君は医薬品会社の研究職で、朱美より六つ上の三十だった。年収からしてローンで分譲マンションが買えないこともなかったし、実際、不動産業者に依頼して探していたが、気に入った物件がなく、とりあえず公団の賃貸団地に落ち着いた。その団地はぼくたちのマンションから歩いて十二、三分のところにあつた。朱美に少しまとまったお金を渡したが、朱美はそれを自分の蓄えとし、貢君が用意したお金で家具や電化製品を整えた。

家から出て、貢君と団地で生活を始める日、朱美は、

「そしたら行くわね」

とバッグを肩に、にこやかに手を振ってマンションから出て行った。

同居した日に入籍していたし、結婚前の二人の話から結婚式はあげないで済ますのだろうかと思っていたが、入籍二、三ヵ月後、家に立ち寄った朱美が、

「親しい友人だけで式をすることになった」

と告げた。友人だけでするから、家族は出なくてもいいということだった。

ところが式の一週間前に、披露宴の座席表を手に明美が来た。

「お父さんとお母さんに出てもらわないとわたし、困るのよ」

と気弱な顔で言う。見ると、貢君の親戚、友人、会社関係で座席表が埋まっていた。

「友人だけであるということじゃなかったのか」

「そういうことで進めていたんだけど、彼の両親が親戚の結婚式にこれまで随分と祝儀を出しているから、出すばかりではなく、今度はこちらが式をして貰ったらどうかと言いついて、それでそういうことになったの」

「席次まで決まっていて、貢君のほうばかりで埋まっているじゃないか。朱美の友人二名とお父さんとお母さんだけじゃ、いくらなんでもバランスが取れない。前もって分かっていたら、お父さんの知り合いにも声をかけて何とか格好のつくようにできたのに」と言ったが、そのことで臍を曲げれば朱美が辛い立場になることは分かっていた。こういう形で式をあげ、披露宴をするなら、事前に一言の相談があつて然るべきではないかと、貢君よりも先方の両親の無神経さに呆れたが、目をつぶって、朱美の言うままに出席することにした。

貢君の両親とは、二人の入籍後、顔合わせの食事をしている。徳庵駅の近くにチェーン展開している寿司店があり、その座敷で挨拶をした。握り寿司を食べながら一時間ばかり、お互いの家族について話した。その寿司店は貢君が予約し、支払いもをするというところだったので、負担にならないよう値段を気にしながら食べた。

二人が賃貸団地に入居後、ぼくたちのマンションと大通りを挟んで向かい合う中古マンションの最上階が売りに出ていると、不動産業者から連絡があった。所有者が賃貸に出していた物件だが、入居者が都合で転居したのを機に売却したいとのことだった。空室になっていたので隅々まで見ることでできたと、朱美が言っていた。その中古マンションは公的機関の住宅供給公社の分譲物件で、管理組合がしっかりしていて、緑の多いマンションとして知られていた。頭金なしで、売買手数料や不動産登記料など諸費用の負担だけでローンが組めたので、二人は即決した。その足で、ぼくたちのところに立ち寄り、貢君は、

「いい物件にめぐり会えて良かったです。賃貸団地で待っていた甲斐がありました」と喜んでいた。

朱美は結婚後、専業主婦を選んだ。子供ができるまで勤めたらと思ったが、朱美の中心で結婚生活のイメージが出来上がっていたらしく、「結婚しますので」とさっさと会社で退職届を出した。前の設計会社を辞めたあと、編みぐるみに熱中し、自宅にこもりがちな朱美を気にする加寿子の様子もあって、知り合いの商社の経営者に頼んで勤めさせてもらった。商社といっても機械メーカーの代理店のようなもので、社員は三十名程度だった。経営者の父親が創業し、家族的な雰囲気の中で手堅く営んでいた。朱美は、先輩の女子社員のスローテンポな仕事ぶりと、そろって昼食をとる休憩室での他愛ない会話を愚痴っていたが、給料はそこそこ出ている。

近くの中古マンションに移ってから、朱美は毎朝、ぼくたちのマンションに立ち寄り、それから買い物に出かけた。加寿子と一緒にスーパーマーケットに行くこともあったが、たいていは自転車で一人で買い物に行った。週に一度、消費税還元セールの日曜日には、加寿子に付いてスーパーに行き、調味料や値の張る肉、魚を買ってもらっていた。生活費は毎月決まった金額を貢君からもらっていて、朱美はその中でやりくりしていたが、加寿子に買ってもらう品物の代金は生活費から出したことにして、そのお金を自己名義の銀行口座に入れていた。

お中元で送られてきた珈琲セットを貢君に持って帰ったらと言った折、朱美は、「お父さん、もつたいないだけよ。家で使えばいいじゃない」

と撥ねつけるように言った。朱美らしいドライな夫婦関係なんだと、そのときはたいてい気にもとめなかったが、

「お醤油を買わなければいけないのよ」

とキッチン調味料を目にして朱美がつぶやいたとき、

「買い置きしている家の醤油を持って帰れば」

と加寿子が気を利かせて言うと、

「そんな上等なお醤油を使ったら、味を覚えてそれを買って言われるじゃない。わず

かな生活費しかもらっていないのに」

と新婚にしては妙に冷めた言葉が返ってきた。朱美たちの夫婦としての愛情の在りかたはどうなっているのだろうか、気持ちに引っかけかりを覚えた。

結婚式はシテイホテルの中庭にしつらえてあるチャペル風の祭壇の前で行った。朱美は着てみたいと言っていたウェディングドレスを身に付け、ぼくとヴァージンロードを歩いた。式に出たくないと言ったものの、朱美に泣きつかれ、腕を組んでヴァージンロードを歩く羽目になったが、悪い気はしなかった。綺麗に化粧をしたウェディングドレスの朱美は、楚楚として見違えるような可憐さがあった。身長一五五cm、体重四〇kg、痩せてはいたが、見苦しいというものではなく細身の体形を保っていた。華奢な体つきといったものだった。

披露宴は、貢君の親戚、友人、会社関係で埋まった。ぼくと加寿子は肩をすぼめて出てくる料理を食べた。入籍半年後の式とはいえ、貢君の両親や親戚は両家のアンバランスな対比に違和感を持たないのだろうか、不思議な思いがした。

朱美と貢君は式のあと、遅ればせの新婚旅行に発った。旅行会社のツアーに混じってシンガポールに行った。三泊四日の旅行から帰ってきた朱美は、

「マールライオンやナイトサファリーを見てまわって楽しかった」

と言っていたが、あまり楽しそうな顔をしていなかった。他の格安ツアーと一緒に回り、食事の折などは朱美が一番若いこともあって、貢君から給仕をするように言われたとこぼしていた。

「わたしたちの半額程度のツアーと同じコースを回って、食事のたびに世話をしなければならなかったのよ。落ち着いて食べられなかった。彼はツアーのメンバーから済みませんねと言われて気持ちが悪かったでしょうけど、なぜ、新婚旅行なのに縁もゆかりもない他人の食事の世話をしなければならぬのかと……」

「そんなことしたくないと、貢君に言えばよかつたんじゃないか」

「言えばぶーとふくれて、口も利かなくなるから旅行が台無しに。だから、わたしが言うことを聞いておけばいいんだろうと」

朱美は給仕のことだけを言っていたが、実は新婚旅行先のホテルで貢君から嫌な事を言われたと、後になって明かした。どんなことを言われたのか、朱美は話さなかったが、おおよそ察しがつく。式に朱美のほうの親族の出席が少なく、会社の上司・同僚に肩身の狭い思いをしたと、そういうことをナメクジのようにねちねち言われたのであろう。

朱美が痩せさせたのは、新婚旅行から帰ってきて二、三カ月経ったあたりではなかっただろうか。

朱美は、加寿子に、

「薬を飲んでいのに、なかなか出ない」

と言って、加寿子が用意した生野菜をよく食べた。朱美は便秘症で、大学時分から便秘薬を飲んだいた。便秘薬を飲んでも効き目が薄い。四、五日出ないこともあると心配していた。

「お母さんはひどい時、一週間出なかったこともあるわよ。便秘するとお腹が張って苦しくなるけど、野菜を食べて水分を摂っていたらちゃんと出るようになるものよ」

「肌が荒れて、口内炎になったりしてるの」

朱美は、それに生理不順になっていることを加寿子に漏らした。結婚式の準備にあれこれと気をつかい、そのあたりから生理に影響が生じたようだ。

それからほどなく朱美は、自分の朝食を手に入れた家に来、食卓で一人食べるようになった。

「彼にじっと見られていると食べづらいから、彼が会社に出たあとで食べることにしたんだけど、お母さんの家のほうが食べやすい」

朱美は、クロワッサンを一つ持ってきて、それと加寿子の手になる生野菜を食べた。貢君は肉類が好きで、野菜は食卓に出してもほとんど食べないため、買う機会が少なく、加寿子が刻んだ生野菜を朱美は、パックに詰めて持って帰っていた。

「便秘でお腹が出ているんじゃないかしら」

と朱美は、服の上から加寿子に触らせていた。

「食べる物、ちゃんと食べてるの。ちゃんと食べないと出るものも出ないわよ」

朱美は徐々に痩せてきた。胸が小さくなり、頬が心なしか痩けてきた。朱美は三度の食事をきちんと食べていると言っていたが、口が渴くのか唇の端を舌でちろりと舐めては、よく水を飲んだ。トイレにもよく行った。

朱美は生理不順が気になると言っていて、総合病院の婦人科に行った。加寿子が付いていた。どういう症状で、どのような治療を受けているのか、朱美も加寿子もぼくには何も言わなかった。検査をし、それに基づく投薬治療を受けていた。

「朱美、どうなんだ。少しは良くなってきたのか」

と聞くと、

「病院には毎週欠かさず行っているんだけど、あまり変わりがなくて。体重が落ちたままだから、それを戻さないと良くならないんだけど……朱美もそれは承知しているようだけど、無理して食べようとすると胃が受けつけなくて戻すと言っていたし……」

加寿子は顔をくもらせた。

朱美は土曜日曜といった貢君の休日には我が家に顔を出さなかった。普段の日はぼくが会社に出かけたあと、家に来て朝食を済ませて、買い物に出かけ、そのまま自分たちのマンションに戻るの、朱美と顔を合わせることがなかった。

ぼくの誕生日に朱美は貢君と二人で来た。お祝いにポロシャツをプレゼントしてくれた。加寿子は変わりがないと言っていたが、朱美の頬は頬骨が目立つほど痩けていた。身体がひと回り小さくなっていた。ブラウスの袖口からのぞく手首が棒切れのように貧弱だった。

「痩せたんじゃない。……きちんと食べているのか」

と言うと、朱美は露骨に嫌な顔をした。加寿子は「駄目よ」と目配せした。朱美が食卓に手を突いて腰をあげた。トイレに行つて戻ってきたが、椅子に座らず、バッグを手にそのまま貢君と帰った。体力が落ちていたようだった。

「貢さんの前であんなことを言うから、朱美、気分を壊していたじゃない。貢さんから食べるのが少ない、もつと食べるもつと食べると言われて辛い思いをしているのに、あなたがあんなことを言うと、笠にきて言われるわよ」

「きちんと食べているのかと聞いただけじゃないか」

「痩せたとか、食べているのかと話題にすることがいけないのよ。朱美のこと、何にも分からないのね」

朱美が貢君にどのような言われているのか、何も聞いていなかった。

しばらくして、ぼくの携帯電話に朱美からメールが届いた。珍しいことだった。

「お父さん、私の病気のことで心配かけてごめんなさい。お父さんに言つてなかったけど、総合病院の婦人科から精神科にまわされて、そこで治療を受けています。お父さんにご迷惑かけて、ごめんなさい」

という内容だった。

「内緒にしておいてと、朱美に言われていたからそれで言わなかったの。朱美、食欲がなく、夜もよく眠れないものだから、婦人科で薬を出してもらっていたんだけど、それがも一つ効果がなく、精神科で診てもらったらということになったの。……ずっと、朱美について病院に行つているから分かるけど、婦人科と精神科では待合室の雰囲気がつたぐ違ふのよ。朱美、それで気にしてあなたにメールしたんじゃない」

「雰囲気って……」

「七十半ばの年老いた母親が五十そこそこの娘さんを連れて来ていて、娘さんが待合室でじつとしていないの。『まだ、まだッ』と診察の順番を気にしてそわそわと待合室の中をうごき回ったり、椅子に横になったり。母親がなだめても言う事を聞かないの。母親が衣類を詰めたような大きなバッグを持っていたから、入院するんじゃないかしらと、朱美と話していたの。その母娘、診察室から病棟に直行してみた。診察室に入つたきり出てこなかったから。そうかと思うと、女子高生のような女の子がスーツ姿の父親と一緒に来て、スナック菓子の袋を手にしたままパクパク食べていたり。それが、朱美のように痩せているのに食べつづけていて、父親が何か言うと、『うるさい』と偉そ

うに大きな声で言ったり。そういうところで治療を受けるようになったことで、朱美、気にしているのよ」

加寿子は轡が取れたように話した。話してホッとしたようだった。自身をうまくコントロールできない患者にまじって、治療を受ける朱美のことが気がかりだったのだろう。待合室にいても落ち着かなかったはずだが、加寿子はそのことはあまり言わなかった。

朱美は痩せていくばかりだった。

「めまいがするらしいの。自分の家で倒れたと言っていたけど、朱美のことだから一度や二度ではないと思うの。何度も倒れていて、体力的に不安でなくなっていて、それでわたしに言ったんじゃないかしら。昼間、ときどき買い物に行かないで家で寝かせてというから、蒲団を敷いて寝かせているけど」

加寿子は、朱美の様子をよく話すようになった。話しておかないと、心配でならぬのだろう。

朱美は、ぼくが会社から帰るまえにマンションに戻っていたが、どんな様子なのかと仕事の都合をつけて早退したところ、朱美はリビングルームの食卓の椅子に座って、自身の脹脛を揉んでいた。朱美の頬骨が一段と目立つようになっていた。

「大丈夫なのか。……しんどくないのか」

「ん……」

体重のことや食べ物のことは朱美の神経を逆なので、遠まわしな言い方しかできない。

細い脹脛を押ししたり揉んだりしている朱美の足首とくるぶしに擦り傷があった。

「どうしてだか、よく分からないけど、血が出ていたり怪我していることがあるの」

朱美は気だるそうに言った。朱美は子供のころから痛み鈍いところがあったが、擦り傷をこしらえているのに気がつかないということはなかった。

「自転車で買い物に行くのもいいけれど、自転車でよく転けると言っていたから、どこかで転けたんじゃないの。……それに、便秘薬、飲みすぎたら駄目よ。効かないからと飲みすぎると体にいいことないんだから」

加寿子は、朱美に言い聞かせるふりをしながら、ぼくに聞かせていた。朱美は返事をせず、「帰る」と言って立ち上がった。

梅雨が明け汗ばむ陽気となってはいたが、朱美は二の腕の中ほどから剥き出しのブラウスと半ズボンを身に付けていた。衣服から突き出ている痩せた手足と細い首が異様に目立つ。栄養不良で痩せ衰えているのか、重篤な病人のように見えた。加寿子がさり気なく手足を隠すように言っていたが、朱美は暑いからと耳をかさず、手足を剥き出しに

していた。受け答えには取り立てて不自然なところはなかったが、社会的な感覚に不自然なところがあるようだった。

加寿子とぼくが朱美のマンションのエレベーターホールのところまで送って行った。隣人や顔見知りには朱美の姿に平気を装っていたが、それでも一瞬「ハッ」と息を呑む気配が伝わった。

「朱美、痩せて体力がないはずなのに、一日に三回も四回も自転車で買い物に行くのよ。買う物がないのに、昼寝から起きるともうすぐに自転車で走りまわるの。膝や肘によく擦り傷をつくっているから、どうしたのと聞いても、さあ、どこでしたのか気がつかなかったって。ほんとに気が付かなかったのかどうか分からないけど、自転車でよく転んでいるらしいの。朱美の自転車、ハンドルの把手やペダルが擦れて歪こまになっているから、それで……」

「ん……」

「便秘薬、効かない効かないと言って、わたしに隠れて量を増やしているらしいの。薬がすぐに無くなってお金が大変だと言っていたし、それに家に来ているときでも三、四十分に一度ぐらいの割でトイレに立っているでしょ。飲みすぎたら駄目よと言っても、飲まないと便秘して気持ち悪いからと。どれぐらい飲んでいいのか聞いても言わないし、病院に通って病院のお薬を飲んでいるのにだんだん弱っていくばかりで……」

「あの半ズボン姿で自転車で走り回っているのか」

「言っても聞かないのよ。家でゆっくり体を休めておきなさいと言いつ聞かせても、振り切るように自転車を出ていくんだもの。……病院の薬はきちんと飲んでるし、欠かさず通院しているけど、痩せていく一方だから、先生も首をひねっているのよ。このままだと入院することになるんじゃないかしら」

「貢君、精神科の治療を受けていること、知っているのか」

「つい先日、話したらいいの。精神科にかかるような病気になって申し訳ないから、なんだったら離婚してくれてもと」

「それで何て言ったんだ、貢君は」

「離婚とかそんなこと考えたこともない。ともかく治療に専念して病気を治してくれたらと言ったって」

精神科に回されたという朱美からのメールを受け取り、気にはなっていたが、そこまで思い詰めているとは意外だった。貢君との夫婦生活になにか引つかかるものがあった。

「階段を上るのも辛いらしいの。それに、少し歩いてもはあはあと肩で息をするし……あなたに言ってなかったけど、家で寝ていても薄べったい体の胸がぱくぱくしている

の。掛蒲団が波打って……ほんとうよ、あなた」

昼過ぎに帰宅し、朱美の寝姿を見た。加寿子の言うとおりの薄い掛蒲団が波打っていた。胸がぱくぱくしている。よくこの体で自転車に乗り買い物に行っているものだと思うた。

「入院してゆっくり体を治さないと。これからの人生のほうが長いんだから」

と目覚めた朱美に言うと、

「ありがとう」

と渴きを覚えるのか唇を舐め、唾液をのみ下していた。

「朱美、めまいするよなの。マンションで夜、トイレに立とうとして倒れたりしてるって。どうして朱美、良くならないのかしら」

朱美をマンションに送っての帰り、大通りの交差点で信号待ちしているぼくの肩に、暗い声で加寿子が言った。

朱美は、摂食障害の権威のいる大学病院に移った。総合病院の医師のすすめで、医師の紹介状を手に朱美は、その大病院の神経内科の佐名木准教授の診察を受けた。加寿子も診察室に入った。まず、体重測定をし、開口一番、

「ようこんな体で歩けるな」

と妙な感心をされ、独身なら即入院してもらうのだが、結婚しているので、とりあえず治療をしながら様子を見よう。そのかわり目標体重に届かなければ入院してもらおうよと言われたと、加寿子が言っていた。一カ月後の目標体重が決められていた。

「総合病院でもそうだったんだけど、朱美の血管が硬くなっているってなかなか採血できないって、看護師さん困っていた。腕に注射針を刺しても思うように採血ができないのよ。ベテランの看護師さんが出てきて、腕をマッサージしたりして何とか採血できたけど、朱美の血液がどろっとしていて濃いものだから採りにくいんですって。丁寧に採血されていたけど、それでも注射器の半分も採れていなかった。血液の量を見て、これぐらいあれば検査できるでしょうと仰っていたけど」

朱美の血液がどろっと濃くなっていることを初めて聞かされた。体重は何キロになっているのかと聞くと、

「朱美が嫌がるから体重計を見てないのよ」

と口を濁していたが、三十^キを切っているようだった。加寿子は目を伏せて、
「一カ月後の目標体重が三十二^キなの。先生からお母さんも一緒に頑張ってくださいよと言われた」

とぼくの機嫌を押し量るように言った。

「脹脛が凝ると言って朱美、よくマッサージしていたけど、血が濃くなって、それで血のめぐりが悪くなっていたのか」

「昼間、朱美の脚をマッサージして、寝かせているのよ。夜、あまり眠れないと言って先生から睡眠導入剤を出してもらっていて、夜だけでなく昼間でもそれを飲んで体を休めるように言われているものだから」

「今でも自転車で買い物に行っているのか」

「体の調子がいいと、自転車で出かけるけど、そんなに遠出はしなくなったようなの。出かけても一時間ぐらいで戻ってくるし、それに家で寝ていることが多くなったし……体力が落ちてきているみたい。歩くにしても、前はすたすと早足で歩いていて、お母さんと歩くと足が遅いから疲れると言っていたけど、それが今は、朱美の足が遅くなつて、わたしが朱美に合わせてゆっくり歩いているの」

大学病院に移って一カ月が過ぎたが、朱美の体重はさして変わらなかった。加寿子は「少し増えた」と言っていたが、三十^キそこそこのようだ。佐名木准教授から入院をすすめられていると言っていた。

「入院したら食事療法が中心になって、目標体重にならないと、他の病気があつても後回しにされるようなの。食事療法だから、アレルギー食物がある場合は別だけど、好き嫌いは一切認められない。きれいに食べないといけないらしいの。看護師さんが毎食、食べ残しがあるかどうかチェックするんですって。ご飯一粒残していても叱られるらしいの。それについていけないと、他の患者さんの治療の妨げになるから強制退院になるって。朱美、ついていけるからしら。……朱美自身も、入院してきちんと治さなければと、自分の体がどうなるか不安になつてきているようなの」

加寿子から入院をめぐる医師とのやりとりを聞いた三日後、

「もう、わたし、どうしていいか分からないの」

と途方に暮れた加寿子の声が降りかかってきた。

貢君がワープで打ったA4サイズ二つ折りのメモを、朱美が加寿子に持ってきた。貢君から必ずお母さんに見せるように言われていた。メモには、

『症状 二月十二日午後十一時三十分ごろ、トイレに行こうと立ち上がり、廊下まで行ったところで倒れる。その物音に気づき駆け寄ると、目は開き、上方を見ているもの、呼びかけても応答が無く、体が少し反った状態で硬直していた。が、二十〜三十秒後に意識が回復し、立ち上がるうとするのを支えていると、「うう〜」と言ううなり声とともに少し反った状態になり、次に全身の筋肉が弛緩し、少し失禁する。この時も目は見開き、上方を凝視していたが、虚ろな感じがした。名前を呼びつづけていると意識を取り戻した』と記されていた。

「貢君はどうして救急車を呼ばなかったんだ。夜中に廊下で倒れ、瞳孔がひらき、体が硬直、失禁し、呼んでも反応のない状態の朱美を目の当たりにして、何を考えていたん

だ。朱美が意識を取り戻したからそれでいいと言うものではないだろう。救急車を呼ぶか、すぐにこちらに連絡してくるべきじゃないか。それに貢君本人がちゃんと説明にこないで、朱美にメモを持たせるのも気に入らない」

「朱美に聞いたら、家でよく倒れていたんですって。貢さんがいるときは抱き起こしに来てくれるけど、いないときは気が付くまで倒れたままになっていたらとか言っていた。早く入院させないと、朱美、ほんとうに死んでしまうような気がして……痩せ細って体がだんだん弱ってきているし……朱美が昼間、家で寝ていても心配なの。どきんどきんと波打っている心臓が不意に止ったりしないかと……」

加寿子は話しているうちに涙声になり、やりきれない思いを目許に浮かべていた。

朱美は入院を決意した。入院にあたって佐名木准教授と親族との面談があるが、朱美は貢君ではなく、どうしてもぼくに出てくれと言った。

「彼は、先生の話聞いても分からないと思う。それに、わたしの病気、変に誤解されるのも嫌だし……先生も、わたしがそれで良ければと言ってくださっているの。ね、お父さん、いいでしょ」

つぎの診察日に加寿子と一緒に佐名木准教授の話聞くことにした。貢君には入院の段取りを聞くということにしておいた。会社からの帰途、マンションに立ち寄り、貢君に入院に要するこまごまとした物はこちらで用意するからと話した。入院費もぼくのほうで負担するというと、一カ月の負担が三万五千円を超えれば高額療養費の払い戻し制度があるので、健康保険組合から大半が戻ってくると、貢君が説明をした。入院費を支払えば、その内容が病院から貢君が加入する健康保険組合に送られ、自動的に貢君の銀行口座に払戻金が振り込まれるとのことだった。よく調べているのだなと思った。

朱美は、気だるい身体を励ますようにハーブティーを淹れ、ぼくと貢君の前に出した。貢君は椅子に座ったまま、そのハーブティーを飲み干した。

佐名木准教授との面談の前夜、加寿子が神妙な顔で言った。

「あなた、怒らないで聞いてね。……朱美のことだけど、明日、先生から話があると思うけど、朱美、便秘薬をすごく飲んでいたらいいの。飲みすぎたら体に悪いからと、何度も言ったんだけど、私の目のとどかないところで……」

「すごくて、何錠ぐらいなんだ」

「それが、先生にきつく聞かれて、朱美が言ったんだけど、一日に五十錠ほど飲んでいたらいいの」

「五十錠？ 五十錠も……」

「先生もそれを聞いてびっくりされていたの。ようそんな無茶なことをしていたな、若いから命があったようなもんだけど、齢がいけば無茶したことが体に出てくるよと仰っていた。……貢さんの心無い態度もあって、ついつい便秘薬に逃げたらしいの」

「心無いって、貢君の態度、いつからそんなふうになったんだ。初めのうちは朱美の言うことをよく聞いてくれていたんだろう」

「ええ、それが結婚式を終えて、新婚旅行先から帰ったところから、態度が変わってきたらしいの。会社から帰ってきて、ぶすつとして、朱美がどうしたの、会社で何かあったのと聞いても何も言わず、食卓に用意している夕食を『いらん』と言って食べなかったり、そうかと思うと本や雑誌を床にバンと乱暴に置いたり、リビングの戸や寝室の襖戸をわざと音立てて閉めたりしてたんですって」

「朱美、そんなことは何も言っていなかったじゃないか。ぼくの誕生日に二人揃ってプレゼントを持ってきたりしてから、朱美がそんなふうな扱いを受けているとは……」

「私たちには良い顔をしていたのよ。買物にも一緒に出かけたりして、貢さんがレジ袋を提げて帰っていたから、朱美から聞くまでは私も、仲良くやっているんだとばかり思っていたの。朱美、隠していたんじゃないと思うけど、小さい頃からどうにもならないところまで我慢する癖があったでしょ。病院に通い、ちゃんと治療をつづけているのに痩せていくばかりでおかしいとは思っていたんだけど、まさか朱美がそんな目に遇っているとは……気に入らないことがあったら、黙ってないで、なんでも話してと、貢さんに再三言ったんですって。でも、何か気に入らないことがあると、ぶすつと不機嫌な顔をして物に当たり、その様子におろおろとする朱美の姿を眺めて、にたつとしていたらしいの。一緒に買物に行ったスーパーマーケットでも、買い物客が多く混雑していると、ただそれだけのことで不機嫌になって、朱美に当たっていたのよ。買い物籠を手にはレジで並んでいると、『そんなに待つんなら買わんでもええ』と大きな声で言われて恥ずかしかつたと言っていたし、それに朱美、自分が悪くもないのに直ぐに『ごめんね』と謝っていたらしいの。マーケットの混雑が気に入らないと、ただそれだけの理由で皆の前でぞんざいな言葉を浴びせられているのに、それでも朱美は『待たせてごめんね』と貢さんに謝っていたんですって。それを聞いて悔しくて悔しくて……そんなふうには下手（したて）に出て機嫌を取ってばかりいたから体を壊したんじゃないのと、朱美に言ったの。そしたら、『私が謝って、それで上手く行くんなら』と何かにつけて謝っていたんですって」

「家にいる間は朱美、結構はきはきと物を言っていたじゃないか」

「結婚して専業主婦になって、うまく夫婦生活をしなければという思いが裏目に出て、気が弱くなり、そこに貢さんがつけ込む形で居丈高になっていったんですよ。ストレスで精神的、肉体的に弱ってくる、ますます朱美は気弱になり、少しの事でもぴりぴりと感じるようになって、そのストレスから逃れるために便秘薬を飲み、その便秘薬で体の中の栄養分や水分が出ていって、脱水症状のような状態になっているみたいなの。お尻から便ではなく粘液のようなものが出ていたって。いくら辛（つら）いからと言って、

親の私たちに一言の相談も何もせず、こんな馬鹿げたことをするなんて……」

「痩せていくばかりでおかしいとは思っていたが、まさかそんな事とは」

「暴力を振るったりというものと違って、精神的に相手を追い詰めていくやり方はなかなか気づきにくいらしいの。初めからぶすつと不機嫌な顔でこれ見よがしに物音を立てていれば、普通じゃないって気づくけど、最初は羊のような優しい態度で相手を油断させておいて、徐々にゆるやかに行為がエスカレートしてきたようなの。……それに、こんなに衰弱する前に私たちに話していてくれたらと。……メールにしても、会社から毎日、朱美の携帯電話に送ってきていて、三十分以内に返信メールをしないと、機嫌の悪い顔で帰ってきて、窓のサッシを指で撫でて『埃が付いている。ちゃんと掃除をしてるのか』とねちねち嫌味を言っていたんですって」

「もともとそういう性格の人間なんだから。結婚するまでは優しい顔して相手の機嫌を取り、結婚して落ち着いてきた頃から地金を出してきたんだろ。相手の学歴や勤務先に惑わされて、人間をよく確かめもせず結婚を決めた朱美にも問題はあつた。……それにしても、便秘薬ではストレスの解消にならないだろう」

「私もそう思うんだけど、朱美が言うには便秘薬を飲むと、腸のあたりがしくしくと痛むけど、痛みがあるうちは痛みに神経がいつて、他の事を考えなくていいからって」
「……………」

「明日の先生との面談、便秘薬のことを貢さんに知られたらと思うと、もうそれだけで神経がイライラするので、それで朱美、どうしてもあなたに出て欲しいって言っていたの」

便秘薬のお金は貢君からもらう生活費から出さず、結婚前から蓄えていた朱美の預金から出していた。加寿子は朱美のことを言い終えてほっとしたようだった。

診察室の丈夫な引戸を開けて入った。正面の椅子に佐名木准教授がでんと座っている。佐名木准教授の後ろに白衣を身に付けた研修生が七、八名、扇形にひろがって立っている。准教授の前に丸椅子が三つあり、朱美を中にして座った。加寿子は准教授に会釈したが、ぼくは初対面だったので、朱美の父親ですと挨拶した。准教授は「あゝ」と軽くうなずき、ぼくの目を見て、

「娘さんのこと、どのように思っておられます」

と問いかけた。とっさのことで「はああ……」と要領を得ない返事をする、

「便秘薬をどれだけ飲んでいたか聞きましたか。嫌な事から逃げるために、考えられないような飲み方をしていた。入院すれば、目標体重になるまで食事療法を行います。その食事療法についていけないからと逃げ出す患者もいます。……娘さんは嫌な事から逃げる癖がついていますよ。逃げるための努力なら考えられないようことをしていた。便

秘薬を一日五十錠も飲むなんて出来ることじゃない。それを逃げるためにしていたんですよ。入院して厳しい食事療法にちゃんと付いていけるのかと。逃げ出さないかと心配しているんです」

准教授はきびしい口調でぼくに語りかけながら、朱美に言い聞かせているのが分かってきた。

「本人が入院して、しっかりと治したいと言っていますので、よろしくお願いします」と頭をさげた。摂食障害のベッド数に限りがあるらしく、准教授は研修生の示すパソコンに目を走らせて、入院の日取りを決めた。

入院の朝、キャリアバッグを引いて朱美が来た。入院用品は買ってあるから、手ぶらでくるように言っておいたが、朱美は時間つぶしにしていた漢字パズルの本やレポート用紙、それに文庫本十数冊と衣類、目覚し時計、携帯ラジオをバッグに詰めていた。

呼んでいたタクシーが時間通りに来た。タクシーの中で朱美が、

「お父さん、ありがとう」

と、しおらしい声で言った。入院費用はすべてこちらで持つからと貢君に言って、入院にこぎつけたのが嬉しかったのだろう。

「今朝、彼から、彼が取り入れた洗濯物をたんでいくように言われたの。入院する朝なのに思ったけど、ぷーっと不機嫌な顔をされるのが嫌だったから……」

朱美は身体の衰弱とともに言葉の抑揚が弱くなっていった。今朝は入院するという安心感からか饒舌になっていたが、呼吸があらく、ところどころ言葉がぼやけた。

「入院したら一週間に一度、面会時間帯に二時間しか会えないって説明書に書いてあったわね。差し支えなければ、お父さんと貢さんの都合を考えて土曜日の午後二時からにしようと思っっているの。洗濯物はお母さんが二日置きぐらいに取り入って、洗濯して届けるようにする。その時に何か欲しい物があれば、メモを入れておいて……持ち物検査があつたりして厳しいようだけど、病気を治すためだからね」

貢君の話をつげさせると、朱美の気持ちが落ち込む一方なので、加寿子は目の前の入院生活を話題にした。

「トイレ以外に部屋から出られないらしいの。看護師さんに用事があれば、ベッドの呼び出しボタンで連絡するようなの」

「しっかりと治すためだから。早く元気になって、一緒に買い物に行くようにならないと、お母さん、寂しいもの」

運転手は黙って運転していた。

大学病院に着いた。玄関ロビーがひろびろとしていた。二階へのエスカレーターが動いていて、ガラス張りの受診受付、清算窓口がL字型にずらりと並び、患者が列をなしていた。入院受付窓口で朱美が書類を出し、窓口の指示にしたがってエレベーターで七

階の神経内科病室フロアのナースステーションに行くと、二階で佐名木准教授の診察を受けてから上がってくるようにとのこと。二階に下り、受診待合室で座っていると、すぐに准教授が出てきて、朱美を診察室に呼び入れた。

ものの十分ぐらいで診察室から朱美が出てきた。さきほどのナースステーションにもどりと、持ち物検査を受けた。三十代の看護師がテーブルの上で本や着替えの衣類を一つずつ取り出して丁寧に調べていた。

ナースステーションから口の字型の吹き抜けの中庭を挟んで向かいの病室フロアのナースステーションが見えた。吹き抜けに向いた廊下の壁がガラス張りになっていて、上下階の廊下を行き来する患者、看護師の姿、それにナースステーションの内部が見えた。目線より下の階のフロアがよく見え、覗き見しているような気分になる。

「ハサミと爪切りは、お預かりしておきます。必要な時は言ってください」

調べ終わった持ち物受け取る時、ピシッと背筋の伸びた口調で言われた。自傷行為を避けるため、規則で決まっているのだろう。

看護師の案内で廊下を歩いた。廊下の突き当たりは窓になっていて、歩行器によりかかり老女が外の景色を眺めていた。その窓ガラスの手前の左側の部屋に他の入院患者の名札とともに朱美の真新しい名札があった。四人部屋だった。部屋のドアは開け放されていた。カーテンも開けられていた。外の壁に開け閉めのできない大きな窓があり、部屋が明るい。朱美のベッドはその窓側の左だった。窓ガラス越しにビルや住宅、それに高速道路が眼下に見える。目を遠くにやれば臨海コンビナートが視野にはいる。春霞の時季だったので、コンビナートの林立する煙突がかすんでいたが、ガラス越しなのでスモッグか霞か判然としなかった。

朱美と多佳子が、着替えの下着やタオル、文庫本をベッドの脇にある備え置き戸棚にしまっている間、ぼくは窓ガラスの景色に目をやっていた。

「この部屋、暑いわね。暖房しているのかしら」
加寿子が小声で言った。

エアコンで病棟全体を一定の室温に保っているのだろうが、日当たりの具合で窓際は温室のようになる。朱美の向かいのベッドには三十代半ばの女性がパジャマ姿の小太りの肢体を投げ出すようにして横になっていた。あとで知ったことだが、うつ病で入院を繰り返しているとのことだった。斜め向かいのベッドの女性は痩せていたが若く、十代後半のようだった。ベッドに座り、ポットのお茶をマグカップにそいで飲んでいたら、朱美のことが気になるらしくこちらに目を走らせていた。朱美の隣のベッドは六十代の女性が検査入院していて、カーテンが引かれてあった。朱美はベッドのカーテンを自ら引くことも禁じられていた。

さきほどの看護師が「検査しますから」と朱美を呼びに来た。ぼくと加寿子は廊下を

挟んでナースステーションに隣接する待合室に移った。朱美はパジャマに着替え、看護師に連れられて検査にまわっていたが、待合室の傍を通りかかったとき、朱美はぼくたちには気弱な笑みを向けた。

待合室に体重計と、公衆電話、お茶の給湯機があった。看護師に付き添われて体重を量りにきた老人や、車椅子のまま電話をかけている患者もいた。朱美と同室の若い女性がポットを手に給湯機にきた。お茶をいれていた。痩せていたが、朱美ほどではなく、それに動作に芯が通っていた。相当回復しているようだった。

朱美が待合室にきた。体重測定検査を終え、病棟での担当医と一緒に来た。三十代後半の人のよさそうな医師だった。

「体重が少ないので、十キロアップの目標体重までには三ヶ月はかかるでしょう」と告げられた。食事療法が順調にすすんだとして一カ月三キロアップが目安らしい。担当医に緊急連絡先として自宅の電話とぼくの携帯番号を言った。朱美と病室に戻りながら、それとなく左右の部屋に目をやった。病室の扉が開放されているので廊下から中の様子が見える。朱美の部屋と違って高齢者の患者が多く、ベッドに座ってぼんやりと廊下に目を向けている人もいれば、足を投げ出して寝ている人もいた。

ナースステーションの背後にトイレがあり、その周囲に病室が並んでいた。トイレは男女別になっていたが、いずれも出入り口にドアがなく、ビニール製のシートが目隠しに掛けられてあった。

「部屋からトイレまでしか行動が許されないの。ナースステーションにも行けないのよ。厳しいでしょ」

朱美が当面の行動制限を説明した。

「検査は終わったの」

と加寿子が聞いた。

「ううん、まだ心電図等の検査があるらしいんだけど、順番待ちなの。通院の時にいろいろ検査したけど、入院に際して改めていろいろと検査するみたい」

朱美は病室に戻り、ベッドに腰掛けた。ほっと吐息をつき、持ってきたポットのお茶を飲んだが、息遣いが荒い。朝からのあわただしい入院手続きと検査で疲れたのだろう。

「少し横になったら」

加寿子が朱美の顔をのぞき込むように言ったが、朱美は「ふん」とポットのキャップを閉めた。

「待合室に給湯機があるけど、あそこにお茶をいれに行くこともできないのか」

朱美はお茶や水をよく飲むので、それが気になった。

「第二ステージにならないと駄目なの。トイレ以外は駄目なの」

「待合室の公衆電話にも行けないとなると、緊急の用事の時に困るだろう。携帯電話が

所持できないんだから」

「そのときは看護師さんに頼めば、ね。お茶をいれに行けないんだったら、食事の時にポットに淹れて貰えるんでしょ。それならもっと大きなポットを持ってくればよかったわね」

お茶のことは加寿子も気にかかっていたようだ。

看護師が病室に顔を出した。ぼくたちの様子を目にして、何も言わずに戻って行った。

「洗濯物も看護師さんを通じてナースステーションで受け渡すことになるのね。なにか欲しいものがあつたら、その時、メモを入れておいて。お母さん二日に一度は来るからね。体気をつけるのよ……」

加寿子は、朱美の手を取って言った。

「おかあさん、心配しないで大丈夫よ。早く良くなるから」

「面会の制限時間がきたようだけど、ポット、もう一つあれば安心だろう。夜中に喉が渴いても大丈夫なように。病院の近くで買ってナースステーションに預けておくよ」

病院のすぐ近くにデパートがある。そう言っつて部屋を出ようとしたぼくの背に、朱美の声がした。

「おとうさん、持ちやすく飲みやすいポットよ」

病棟の空気にふれて少し安心したのか、朱美の声に幾らが張りがもどっていた。